

シャルジャ港町の発掘

佐々木 達夫 (金沢大学名誉教授)

佐々木 花江 (金沢大学埋蔵文調査センター)

はじめに

2012年11月から2013年5月、アラビア湾(ペルシア湾)の港町遺跡を発掘した。発掘地点はアラブ首長国連邦シャルジャ首長国の都市シャルジャ旧市街の元海岸線である。18世紀から19世紀のアラビア半島ペルシア湾岸でもっとも栄えたと言われる町の中心部海岸を2,500㎡掘った。これまでコールファッカン、ディバ、フジェイラ、コールカルバなどをオマーン湾岸で、ハレイラ、ジュルファール、ジュメイラなどをアラビア湾岸で発掘調査してきた。イスラーム時代の地域社会の生活を出土する遺構と遺物から復元し、生活を支えた1つの重要な要素である貿易による文化交流を探ることが主な研究目的である。

発掘概要

シャルジャの旧市街部分はペルシア湾に伸びた砂州によって形成されたクリーク内側の海岸に沿っていたと推定される。その中心部を発掘し、第1層とした20世紀前半の層位から石積壁基礎のスーク・シナヒーヤと倉庫建物跡と幾つかの住居建物跡を確認した。ゴミ穴、炉、井戸も発見され、数百枚のコインも出土し、当時の生活が反映されていた。その下に堆積する19世紀から18世紀後半にかけての第2・3・4層の砂の層内からナツメヤシ枝葉で作られた建物の柱跡を発掘した。人々が捨てた大量の貝殻層に混じって、現地土器、イランの土器と施釉陶器、ヨーロッパ陶器と中国の磁器、食料残渣の魚骨や動物骨、鳥骨、ナツメヤシの実、ココナッツ殻、コインや石製品、ガラスなどが出土した。ガラスのバングルやコールステティック、石製ビーズは女性もそこに住んだことを示す。漁業、真珠採取、貿易を主とする人々の生活を窺わせる資料と、19世紀最大の産業であった真珠採取後の大量貝殻を海岸に沿って捨てた状態が復元された。

I. 発掘準備

1) シャルジャの歴史的背景

シャルジャはドバイ北東十数kmのアラビア湾(ペルシア湾)岸に位置する。狭いクリーク Al Khor が湾岸に沿って延び、その内陸側に町が築かれた。現在は内陸の砂漠上に都市が拡大している。アラビア湾岸の人々は貿易、漁業、真珠採取が基本的な生業と言われるが農業や移牧も行い、19世紀はシャルジャがアラビア半島側で最大の町の一つに発展した。

シャルジャの名が現れるのは1580年にベニスの旅行家 Gasparo Balbi が記した“Viaggio dell’Indie Oriental”がもっとも古いと言われる。Balbi はカタールからラッセルカイマに至る真珠採取の浅瀬と、カタールからマスカットに至る真珠採取の町名を記し、真珠採取の季節には真珠を取る人々が季節的に住む町ができるという (Slot 1995, pp 36-39)。町名のなかにはドバイ、アジュマン、シャルジャなどが見える。1756年のオランダ人 Niebuhr 報告には、カタールからラッセルハイマの間でシャルジャは人々の住んだ数少ない地の一つで、Qawasim 首長支配の小さな島にあるという (Slot 1995 p40)。1760年代は Niebuhr と Knipphausen によると、貿易の小さな村としてシャルジャ、ジュルファール、シールの三ヶ所が知られている (Slot 1995 p41)。

シャルジャ首長国スルタン首長は次のように述べる (Sultan 1994)。「1799年のフランスのエジプト遠征はフランスのインドに対する優位性について、イギリスに警戒させることになった。イギリスは湾岸を支配して貿易するためジョン・マルコルムを送った。1800年、マルコルムはマスカットに行き、オマーンのイマームとシラーズに行きペルシアと契約し、インド総督は10隻の艦隊をカワシム家攻略に送った。1809年、イギリス艦隊はボンベイを出航し、ラッセルカイマを砲撃し、多くが犠牲になった。70隻の船、すべての家が焼かれ、イギリス軍はかなりの財産を

略奪した。さらに艦隊はカワシム支配のペルシア海岸の港で船を壊しアラブ人を殺しながら進んだ。1813年、カワシム家のスルタン首長は部族とともにラッセルカイマからシャルジャに移動し、シャルジャは地域の中心となった。1819年、ボンベイ総督はカワシム家に軍隊を送り、ラッセルカイマの町さらにカワシム家支配の港町を破壊し、イギリスは首長と海事条約を1820年に結んだ。」

2) 古地図と古写真

シャルジャはヨーロッパで作成した17世紀の地図に名前が記載されており、シャルジャのスルタン首長地図コレクションにもそうした地図が数点含まれている。シャルジャ町全体を描く最初の地図は1820年に作成された。シャルジャ町の姿を十分に推測させる1820年製地図がイギリス東インド会社によって描かれ、1822年にも同会社によって二番目のシャルジャ町全体と周辺のナツメヤシ畑が描かれた。二つの地図には家々の配置が描かれ、クリークに面して家が並び、内陸側は町壁で囲われている。ナツメヤシ園は最初の地図にはないが、2年後の地図には町の両側に描かれている。ただし、発掘された海岸地が示す19世紀の姿はナツメヤシ枝葉家が立ち並ぶ風景で、地図と異なる様相であった。

発掘地点及びその周辺の写真は、1907年頃に撮影されたクリークに沿う石積家並み、1935年に町全体が撮影された航空写真が古い。1960年の航空写真は鮮明で、銀行通り建設前のシャルジャ町の状態を良く示している。

シャルジャ及びその周辺の地図はヨーロッパ人が作製したもので、アラブ人が作製した地図はあったとしても現在に伝わらない。シャルジャの風景写真も20世紀に入ってからのものであり、日本やヨーロッパで19世紀後半の都市風景写真がかなり残る状態と異なる。

3) 発掘準備と整理

2012年春からシャルジャ政府職員と連絡をとり、7月に現地で発掘に関する打合せを行い、10月28日から11月11日に表土剥ぎ作業、11月8日から2013年5月12日までパキスタン人作業員35名ほどと発掘調査を実施した。発掘地点はアラビア湾岸に

位置するシャルジャのクリーク内陸側に沿う海岸通に直行する銀行通りで、旧砂浜部分から内陸に60m、旧海岸に沿って幅45mほどを発掘した。

発掘に先立ち、2012年にサザンプトン大学研究者によってNon-intrusive magnetometer and ground penetrating radar (GPR) 調査が発掘地点を含める周辺地域で行われた。それは発掘地域の表面下に廃棄物が存在することを予想させた。表面から0.5mにかなりの範囲で別々の障害物がある。発掘の結果、これは建物壁石が移動され廃棄された場所と推定された。0.5～0.7m下に建物材があり、1.5mまで続いている。2m下では消え、建物は無くなる。発掘の結果、これは第1層1の建物壁の残存する基礎部分であり、それより下にも建物はあがるが石積でないため、GPRでは検出されなかったことが分かる。発掘後のセクションで第1層の石積壁は1b地区の場合、海拔2.5～2.0m、表面下0.5m～1.0mにあった。

2012年12月20日、Gulf Newsは「GPRを利用すれば発掘が不要となり、とくに市中心部ではそうである」と言う現地政府職員の意見が報道された。残念ながらそれは事実を伝えていない。GPRでは地域の日常生活を伝える物資、時代、多くの人が住んだナツメヤシ枝葉家跡の情報を得ることができない。真珠貝の堆積、ゴミ穴、柱跡、炬や僅かな痕跡なども見つけることができない。そうしたものをこそ町の歴史と生活を伝える重要な考古学資料となり、考古学の発掘はGPRが記録できない町跡の詳細な情報を得る基本的な作業である。

発掘後に出土品をオマーン湾岸ディバの倉庫に運び、2013年8月から9月、12月から2014年2月、2014年11月から2015年2月に数十トンの貝殻のなかから土器などを分類する整理作業を行った。

4) 発掘区域周辺の工事等による掘削

発掘区域周辺には建築などの工事現場が多く、発掘中にも地面に大きな穴が掘られていたが、シャルジャ市内で考古学的な注意が払われたことはない。穴が掘られていた3地点の状況を述べる。

文化遺産局は2012年11月から12月にかけて、発掘区域に接して北東側にあるサクルスーク通りに屋根を延長するため22ヶ所の支柱穴を掘った。その穴の壁断面には発掘地点と類似する層位が見えた。地表下

90cm 面に建つ石積壁家、地表下 50cm に炉を伴う黒ずんだ層がある。発掘地点の第 2 層と同じ真珠貝殻層は発掘地点に近い側で、地表下 90cm に見える。海岸に沿って貝殻層が堆積している状態が推測できる。

シャルジャ美術財団の空地に 2012 年 12 月、ナツメヤシを植えるため大きな穴が掘られた。穴の深さは 2.1m で水は湧かず、断面に 3 層が見える。上層の下部面に建物壁跡が残り、中層は汚れた砂でゴミ穴と炉が見える。下層には大きなゴミ穴と壁跡が見える。残りの良い状態で少なくとも地表下 2 m まで遺構が残ることが分かる。貝殻層の堆積は見られない。発掘地点は道路建設で最上層層が削られていたが、市内の大部分は層位的な堆積が残ると推定できる。

アルサスークとサラディンモスクの間にナツメヤシを植えるための円形穴が掘られたが、2013 年 2 月 3 日、地表下 1.65m で水が湧いた。小雨が 2 月 2 日に降ったためと思われる。貝殻層の堆積はない。シャルジャ旧市街地域の地下に町跡が層位的に残ること、海岸に沿う狭い範囲に貝殻堆積が見られることが分かる。

II. 発掘

1) 発掘経過の概要

2012 年夏からシャルジャで発掘調査の打ち合わせをシャルジャ美術財団長フル王女、首長オフィス、シャルジャ都市開発局、文化遺産局と行った。10 月末から 11 月中旬にかけて発掘地点のアスファルト舗装を機械で剥ぎ、2012 年 11 月 11 日に発掘を開始し、アスファルト下の土砂を作業員が手作業で掘り下げた。都市開発局から入手した道路地図はすでに変更されたものであったため、発掘開始直後に発掘区域の再設定を行った。

発掘区域の中央に海岸に平行する歩道を作り、2 つに分けた区域をフェンスで囲った。発掘地点は道路であったため、地表面はほぼ水平である。二つの区域は海側を 1 区、内陸側を 2 区とし、さらに細い歩道で二区分し、1a 区、1b 区、2a 区、2b 区の 4 区分とした。いずれの区画も変形である。発掘区設定面積は 2,766 m²で、歩道部分などを除くと発掘した面積は 2,500m²である。中央部分のセクションの海拔は、海側が 2.98 m、中央の歩道部分が 3.05 m、内陸側が 3.13 m である。銀行通りと平行な線を基本線とし、発掘区域内

に 5 m 枠を組み、層位ごとに発掘した。磁北は基本線から 59 度東である。

発掘区域内に歩道を設置したため、人々はフェンス越しに毎朝バケツ 2 杯分のゴミ、紙コップ、プラスチック袋、ペットボトル、ガラス瓶、缶、紙、タバコと空箱、ティッシュペーパー、バナナ、オレンジ等を投げ捨てた。なぜ発掘でゴミが大量に出土するかを見ているようだった。歩道を設置したため、その下に埋もれた第 1 層のスーク基礎部を掘ることができなかった。発掘初日の 11 月 11 日、近隣で水道管が破裂し、遺跡内は池のようになり、発掘が中止となった。11 月 30 日、大雨が降り、銀行通りを洗うように流れてきた汚水が遺跡内に溜まった。建物壁跡、柱穴跡、ゴミ穴は黒いタールで覆われて消えた。12 月初め、遺跡周辺を 4 段のセメントブロックで囲い、周辺から水が流れ込まないようにした。

12 月中旬、第 1 層で旧スークや近くの家基礎部が何箇所かで確認された。捨てられたゴミや真珠貝殻の範囲、灰と炭を含む炉、柱穴跡、生活用具が発見された。1977 年の銀行通り建設に伴い、家壁基礎はほとんど削られていたが、海側の壁基礎は残っていた。2b 区の第 1 層下部で平面円形の井戸 2 つが並んで発見された。珊瑚と軟質濁堆積岩が井戸枠として積まれ、大きなものが新しく、小さなものが古い。なお、軟質濁堆積岩は家壁基礎に使用していない。

12 月、第 1 層の発掘が進むにつれ、地表下 1 m で悪臭の漂う地下水も現れ始めた。地下水位は高く、発掘前から地表下 1 m で水が湧くと予想されたが、1 区で 11 月から 12 月に地表下 1 m で汚水が湧き出した。湧水レベルは 1 区の第 2 層上面である。1 月 5 日の地下水位面は 1b 区の北西角で海拔 2.06 m、南西角で海拔 2.03 m、2a 区の北西角と南西角で海拔 1.98 m であった。2 月は少し雨が降ったが、周辺地域で排水作業があり地下水位は海拔 1.45 m に下がり、2 月も発掘を継続できた。排水作業は 1 月末に始めたが、発掘区域に排水を流すなど業者の不手際があり、2 月 20 日に海に流れる排水路を用いて発掘区域内の水位が下がった。排水用パイプ打ち込み穴径は 10cm ほどと言われたが 70cm ほどになり、それが 1 m 置きに打ち込まれた。発掘範囲が狭められ、深く掘れる面積はおおよそ 700m²になり、発掘方法とセクショントレッチ位置などを変更した。その後、時間の制約で 1a 区、

2b 区の一部を第 4 層まで掘り下げることとした。

2013 年 1 月末、第 1 層の発掘はほぼ終了し、2a 区と 2b 区は第 2 層表面が現れた。排水作業に伴い、2 月末には第 1 層の波打ち際の家壁が海拔 1.3 m の砂上に建てられたことが確認された。壁海側面の海拔 1.4 m 高さに貝殻が並んで付着し、建設当時の高潮面を示している。また、旧砂浜はなだらかに海に向かって下がり、波打ち際より内陸に 30 m ほど第 2 層の貝殻層が堆積していることも確認された。波打ち際に家壁が建てられた後に、炭混じりの黒ずんだ砂が海側室内となる貝殻層の上に投げ込まれ、床面となる平坦面を造成していた。第 1 層の海側建物となる旧スークは第 2 層の厚く堆積した貝殻層上に建てられており、政府職員など関係者が言う年代よりも新しいことが明らかとなった。貝殻層は真珠貝採取後の廃棄跡であることも判明した。

3 月後半に 5 m 幅のトレンチを 1a 区の第 1 層部屋 2 の下に設定した。第 1 層家壁下に第 2 層の薄い貝殻層が堆積しており、柱穴跡、炉、小さなゴミ堆積が第 2 層から発見された。確認面からの柱穴跡深さは 10 cm から 15 cm ほどであった。クリークから 5 m 離れた場所で人々が生活していたことが明らかとなった。3 月、2a 区の第 2 層に石壁が残るかどうかも確かめるため、10 m × 15 m の範囲を掘ったが、第 1 層石壁下に石壁は見つからず、柱穴跡、炉、ゴミ穴が第 2 層ないし第 3 層で発見された。

3 月と 4 月に 2b 区で第 2 層を掘り、薄い何枚かの層のなかで多くの柱穴跡が発見された。北東側には厚い貝殻層が海に向かって傾斜して堆積していた。南側と西側の第 2 層には貝殻層がなく、砂層のみであり、第 2 層内のいくつかの薄い堆積層のいずれからも数多くの柱穴跡が発見された。貝殻層には 5.5 cm から 6.0 cm の長さの 2 年生育の真珠貝が多く堆積していた。コールファッカン遺跡の 15 世紀から 16 世紀の層と比べると魚骨の出土量はシャルジャが少ない。この層は単なる生活ゴミの堆積層というより、真珠採取の作業場所で生活ゴミも捨てた場所であったと想像させる。

4 月後半と 5 月前半、1a 区と 2b 区の第 3 層を掘った。狭い範囲に薄くゴミが堆積し、貝殻、土器片、魚骨、灰、炭の小片が含まれていた。2b 区の一部には多くの柱穴跡が残っていた。

5 月初旬、1a 区と 2b 区の第 4 層を掘った。第 4 層は最下層の生活層であり、それより下の層からはトレンチ内で土器片を発見することができなかった。

今回の発掘はシャルジャ市内における最初の発掘となったが、関係者から考古学と発掘の理解を得ることは難しかった。建物跡の検出については理解できる人もいたが、建物跡ばかりでなく、そこに住んだ人々が使用した炉やゴミ穴、出土する陶磁器や生活用具が一体となって生活を復元する資料となることを理解できる人はいなかった。同じ場所を層的に発掘することで、地域の変化を捉えられると説明したが、建物跡が見つかる部分の一部を掘れば良いと思っているようだった。半年間の発掘であったが、発掘機材も注文から入手まで数週間かかり、作業員の恒常的な確保も難しく、排水設置作業が遅れ、第 2 層以下は一部の範囲を発掘するに留まった。そのため次年度冬季期間の発掘も検討したが、発掘区域内を含む都市計画が予想され、2013 年 5 月 11 日に発掘作業を終了した。

出土品は 130 km ほど離れたディバの発掘事務所に移動した。内訳は 1a 区第 2 層出土未選別品 15 トンと 930 箱の出土品を 7 トン車で 4 回、3 トン車で 10 回に分けて運んだ。1 箱に入れた未選別品の重さは 23 kg ほどであり、他に 13 トンの貝殻は重量測定後に遺跡に残した。

2) 断面図と生活層

銀行通りに平行する主セクショントレンチを遺跡の中央で、1b 区と 2b 区の南西側に設置した。銀行通りの造成土を表土層とした。表土層と第 1 層の間にもいくつかの遺構があり、泥堆積や石、植木用穴が表土層の下、第 1 層の上及び第 1 層を掘りこんで発見された。これらは 20 世紀中頃と後半の時代に属し、第 1 層の表面は銀行通り表面から 50 cm 下となる。

第 1 層は表土層と第 2 層の間に位置する。多くの自然堆積砂層が薄く水平に近く広がり、緩やかにクリーク側に傾斜して下がる。1a 区と 1b 区のクリーク側では表面がほぼ平坦となり、その厚さは 1 m ほどとなるが、内陸側は堆積が薄くなり、道路建設で削られて 2b 区内で第 1 層は消える。第 1 層の底面は 2a 区と 2b 区では水平で、1a 区と 1b 区ではクリークに向かって傾斜している。第 1 層の建造物の壁は第 2 層上面の貝殻層上に壁石を置いて建ち、基礎部に溝などは掘ら

ず、平坦のままである。

第1層は黒く汚れた層位で、小さな炭片、灰、土器片、コイン、鉄や銅製品、自然に砕けた貝殻、魚や動物の骨残滓を含んでいる。建物内は多数の小さな炭片を含む黒い汚れた砂が次第に水平に堆積しており、はっきりした表面や床面は見られない。壁や床に漆喰を塗った部分は見られない。第1層内の堆積土中にゴミ穴や炉がある。ゴミ穴内には汚れた砂とゴミが堆積している。第1層は当時の水際に建てられた壁から内陸側に5m部分から傾斜が急になり、厚く堆積した層の底面は壁基礎に達する。壁基礎は海拔1.3mで、当時の高潮面と同じである。クリークに沿う第1層のスーク建物は厚い貝殻層の第2層表面に建つ。建物は20世紀初頭に建造されたようで、19世紀末よりは遅い。

第2層の各地区でナツメヤシ枝葉の家跡が発見された。貝殻の広がる範囲は水際までである。家跡が発見される場所、調理の場所、貝殻廃棄場所、ゴミ穴の掘られた場所などと土地の利用が違っている。第2層は多くの柱穴跡が発見された2b区で20cmから25cmの厚さである。とくに第2層最下層あるいは第3層砂層表面に柱穴跡が多い。第2層の堆積層は内陸側ほど薄くなり、海側ほど厚くなる。第2層内にはいくつかの薄い貝殻層があり、セクションに見える主要な2つの貝殻層2a層と2b層があり、1a区と1b区では1mの厚さとなる。

第3層、第4層も家の建つ生活層であり、1a区と2b区の第2層発掘部分の下で柱穴跡、貝殻層、小さなゴミの広がり面を発掘した。第1層から第4層までは生活の跡が良く残っているが、その下には薄い自然堆積の砂層と小さく砕けた貝殻を含む砂層が交互に水平に堆積し、僅かに海に向かって傾斜して下がる。セクショントレンチ内で土器などの人工物は発見できず、家跡は見つからなかったが、人々が近くに住んでいなかったとは言えない。

生活層は層位の厚さを見ると、第1層、第2a層、第2b層、第3層、第4層に分類できる。各層位の推定年代は第1層が20世紀前半、第2層が19世紀後半から中頃、第3層と第4層が19世紀前半から18世紀末、または第4層は18世紀末から中頃と思われるが、出土品による詳細な年代研究が必要である。発掘した各層位はすでに攪乱を受け、上層の生活によって下層は削平されている。姿を現した遺構とその状態

は地区によって異なり、それは居住した住民の生活様相と土地利用が場所によって違うことを反映している。

3) 建築遺構

銀行通り造成土を剥ぐとすぐに第1層表面が現れた。1970年代のアスファルト道路（銀行通り）建設時に当時の建物が撤去され、20世紀中頃以降の層位は発掘区域に残っていない。第1層の堆積土は20世紀初頭から中頃までと推定される。当時の水際に並ぶ建物列が第1層で現れた。建物壁は珊瑚と石灰岩を積んで造られ、漆喰は塗られていない。建物は倉庫と商店として用いられたようである。壁厚さは平均で60cmから65cmと75cmから85cmである。スーク建物の基礎部は当時の海岸線の水際に並行している。建物跡は6棟が発掘され、2棟は一部が発掘された。現在使われているスークの店は幅3.0mから3.5mであり、それは伝統的に用いられたチャンドルウッドやマングローブ材の垂木の長さである。2棟はその倍、1棟は3倍の幅であり、屋根梁は部屋中央の柱で支えられていた。これらの大きな部屋は輸出と輸入した品やその他の倉庫であったと推定される。スーク入り口に面する細い道路の向かい側すなわち内陸側には連続した石壁造りの建物がなく、1a区の南西角に石壁基礎が残るに過ぎない。スーク道路は3m幅で狭く、自動車を利用する前の伝統的な仕様である。石壁に沿って道路際に多くの柱穴跡が発見されたが、日影を作る柱用であろう。それらの柱穴跡をナツメヤシ枝葉家の跡と言う人もいるが、道路上の狭い部分に家を建てることはできない。発掘したスーク道路を銀行通りの両側に直線で延ばすと、現在も残るスーク通りにつながる。1960年代にはスーク・シナヒーヤと呼ばれ、銀行通り両側と連続するスークの一部であったためである。

家1は第1層の2a区と2b区で発見された。2a区の小さな部屋には、多くの真珠貝片、多数の小さな炭片、小さな土器片などが部屋の最下層の床面に残っていた。1つの土器炉と1つのコインも同じ部屋の最下層部分で発見された。部屋床の堆積土は硬く汚れているが、最初の床は第2層表面のきれいで柔らかい砂の上に造られていた。2a区内の西側に破壊された家壁の痕跡が珊瑚1個分のみ部分的に残っていた。

平面円形の2つの井戸が隣接して第1層 2b 区で発見された。井戸1は小さく内径62cm、井戸2は大きく内径120cmである。井戸1は砂と炭片混じりの土で埋められていた。井戸2は珊瑚と海石を積み上げて枠を造る。中に車タイヤや大きな鉄製品の部分などを含むゴミが投げ込まれていた。銀行通り建設に伴う建物撤去に際して井戸も廃棄されたことがわかる。井戸内ゴミから井戸1が最初に造られ、井戸2はその後に造られたと分かる。井戸の塩分を含む水は洗濯や塩分に強い植物や木に用いられ、飲料水は1km内陸の墓地近くにある井戸からロバの背に積んで運んだと言われる。こうしたことを地元の人々は20世紀後半のこととして記憶していた。

柱穴跡は多数発見された。第1層の柱穴跡は屋根支え柱か、日影用の天幕を支える柱であった。第2層、第3層、第4層でも多くの柱穴跡が発見されたが、それらはアリーシュ家の壁を支えるものであり、第1層にあった石造り壁は第2層、第3層、第4層から発見されなかった。第2層、第3層ではナツメヤシ枝葉家の柱穴跡から、同じ範囲で家が建て替えられたことがわかる。

4) その他の遺構

ゴミ堆積、ゴミ穴、真珠貝殻の散乱する範囲、真珠作業場、土器炉、炉などが発見された。

土器炉すなわちタヌールは27基が第1層と第2層で発見されたが、第3層、第4層には無かった。土器炉は地表面下に穴を掘って土器壺を埋め、内部でパンなど食料を焼く。第1層の1つの土器炉は土器が逆さまに埋めてあったが、その他の26個の土器壺は正位置で埋められていた。土器内部の底部には白灰、赤く焼けた砂、黒い炭を含む白灰が薄い水平な層をなして堆積している。土器は特別な種類を用いるのではなく、一般的な壺や甕を使用している。

5) 出土品

出土品の整理は、泥や砂を落とし、磁器などは水洗し、注記して箱詰めし、倉庫に保管して目録作成する。こうした整理作業は発掘中も事務所で日々行い、記録を作成した。遺跡で発掘作業が終わった後は出土品をディバに運び、貝殻片と遺物を分類する作業を2015年2月まで続けた。主要な出土品の種類別の項目を挙

げる。

陶磁器

ヨーロッパ陶器：大碗と中皿が多い。オランダ製やイギリス製が含まれる。手書き文様やスタンプ文、転写などが多い。

中国陶磁器：染付と色絵磁器、中皿（盤）とコーヒーカップが多く、福建省産が主となり、景德鎮産もある。褐釉陶器壺は出土量が少ない。

日本陶磁器：白磁の小皿とカップや転写装飾の皿で、出土量は少ない。

イラン陶器：薄青釉黒彩陶器、大碗、大小瓶で、出土量は多い。以下は出土量がきわめて少なく、素地は青釉陶器と同じ軟質黄色である。赤釉陶器碗、黄釉陶器碗、白濁釉陶器碗、瓶。無釉陶器は瓶が主で、素地は硬質薄ピンク色と軟質黄色がある。表面に線刻などの文様が見られるものが多い。

周辺地域産土器：大量に出土している。土鍋、貯蔵用壺瓶が多い。大部分の素地は砂粒混じりで粗く赤色。白化粧土上に赤色スリッ塗彩の水差、碗、素地は粗く赤色。大きな黒粒混じりの土器、大盆、壺。

ガラス：大小の瓶、バングル、コールスティック、ビーズ。

青銅製品。銅製品：コイン。鉄製品：ドアーロックや釘。釘の出土量が目立つ。石製品。

骨：動物骨、魚骨、鳥骨。魚、イカ、ヒツジ/ヤギは多く、ラクダ、ニワトリ、その他もある。

貝：食糧となる6種類の貝が主。オイスター真珠貝が全体の75%を占めて多いが食用かどうか不明瞭。

ナツメヤシの実。実を丸く、あるいは扁平に丸めた加工品。ココナッツ殻。

出土品に関する注目する点について。ビーズとバングルは少ない。ガラスのバングルとコールスティックは第2層から出土している。カーネリアンビーズ数点が第3層から出土している。青釉陶器オイルランプ1点と土器香炉数点が第2層から出土している。土器はどの層位からも多く出土している。ヨーロッパ陶器は中国陶磁器よりも出土量が多い。

6) 遺跡の推定年代について

銀行通りのすぐ下面となる第1層からは、主に19世紀末から20世紀前半の製品が出土している。第1層の最下層は20世紀初頭になると思われる。年代が

推定可能な出土品は 400 点を越えるコインと大量に出土した陶磁器である。コインは第 1 層が多く下層でも出土するが、第 3 層、第 4 層では非常に少ない。

発掘終了の時点で、第 1 層から 173 点の銅貨、4 点の銀貨、3 点のアルミニウム貨が発見された。年代が読み取れるものは、1816 (x1), 1832 (x1), 1833 (x1), 1835 (x1), 1858 (x1), 1862 (x1), 1863 (x1), 1865 (x1), 1895 (x1), 1897 (x91), 1908 (x2), 1913 (x3), 1917 (x1), 1918 (x1), 1927 (x1), 1928 (x1), 1929 (x1), 1933 (x1), 1942 (x1), 1973 (x1) である。(x1) は 1 枚を示す。もっとも新しい年代のコインは 1973 年で、唯一の UAE 製であり、銀行通りを造った際の造成の最下部層から出土している。多くのコインはマスカット製である。20 世紀前半のコインは英領インド製が多い。

第 2 層では、第 1 層で代表的で主であった 1897 (1315AH) 年のコインが出土しない。1858 年コインが第 2 層のピットから出土し、第 2 層は 19 世紀後半であると推定された。

ヨーロッパ陶器、中国陶磁器、日本陶磁器、オマーン陶器、イラン陶器は、コールカルバ遺跡表土層、コールファッカン遺跡第 1 層、ディバ海岸遺跡の第 1・2 層の出土品と同じタイプである。オマーン褐釉陶器壺の出土例は他の遺跡と比べると少ない。アラビア湾岸のいくつかの遺跡では 14～15 世紀の典型的な貿易品であった中国とイランの陶磁器が出土するが、それらと同じ種類は発見されない。同様に 16～17 世紀の一般的な中国、日本、東南アジア陶磁器も発見されない。イラン青釉下黒彩陶器は第 1 層から第 4 層まで一般的な製品である。出土した陶磁器からおよその年代を推測すると、第 4 層は 18 世紀末に始まり 19 世紀前半にかけて、第 3 層は 19 世紀前半、第 2 層は 19 世紀後半となるようである。

III. 遺構

1) 第 1 層

建物と道路が発見された。家壁はサンゴ、硬い石灰岩、軟質の砂岩、砂と貝が固まった海石で造られ、間に詰めるモルタルに漆喰は使わない。内陸側の 2a 区、2b 区の家壁は基礎石 1 段分のみ残り、2a 区には部分的な家壁基礎もいくつか見られる。2a 区、2b 区の家壁は第 2 層の貝層上に建つ。いくつかの家壁は銀行通

り建設時に削平されて失われたようである。残された家壁は 20 世紀中頃より古く、20 世紀後半の家は残っていない。

1a 区、1b 区は家壁基礎の残りが良い。道路に面する家壁は貝層の上、第 2 層表面上に建設されている。波打際に近い家壁は盛土のために投棄された土の上に建ち、土には小さな炭片と海岸砂が含まれている。海に接した波打際壁は平均して海拔 1.3 m の海砂上に建つ。外壁表面の下方には海拔 1.4 m まで海の貝が付着し、20 世紀前半の高潮時の高さが推定される。

20 世紀前半は海岸砂浜がクリークに向かって傾斜して下がるのがセクション図からも明瞭である。波打際家の厚い壁は海岸砂浜の水に接する部分の上に建てられ、その後に壁内側に灰色砂と炭片混じり砂が投棄され、平坦な部屋床面を造成しており、スークの海側床下が厚い堆積となる。波打際家は第 2 層の厚い貝層上に建てられるが、波打際に近いほど層は薄くなり、水に接する部分でほとんど貝層が消える。

スークの店舗または倉庫が建てられる以前、この地域は海岸砂浜の真珠採取作業場だったようである。貝殻堆積は波打際から 30 m 内陸側まで広がり、それは発掘範囲全体で見られる。

部屋内側の床には漆喰などの痕跡が残らない。部屋内に堆積するのは砂で、炭、貝、骨、ガラス、陶磁器などの破片を含んでいる。床面はしだいに堆積土により上がったようで、明瞭な床面があったわけではない。いくつかの薄く水平に堆積する層には小さく砕けた石が含まれており、それは追加修復した壁を造る際に伴う床面のレベルを示しているようである。

短い石壁が第 1 層部屋 2 床面レベルの下に残っていたが、これは部屋 2 を造る際に途中で廃棄されたものである。ピット 24 は第 1 層 2b 区の大きく深いゴミ穴で、内部に暗色砂が堆積し、多くの陶器片とゴミが混じっていた。2a 区の第 1 層と第 2 層の間の限られた部分の砂層上で壁材料粘土もしくはモルタルが堆積しており、第 1 層家壁のすぐ下方とその周囲のみに見える。第 1 層家を建てる際に建築材料を置いたように見える。

2) 第 2 層

第 2 層は主セクションで明瞭に確認でき、1a 区、2b 区では第 2a 層と第 2b 層に分層できる。第 2a 層

は貝殻を多く含み、貝殻層と呼べる。第2b層は貝殻が混じる砂層である。

地下水位を下げるパイプ設置のため、第2層2a区に4本の長いトレンチを設定した。トレンチ内の第1層家壁直下で2つの土器炉タヌールを発見した。

2a区で10m×15mの範囲を掘り下げると、第1層家壁直下から穴、炉、壁材料粘土が発見された。第2層2a区で小さなゴミ穴178, 179, 180, 181が一行に並んで発見された。穴内に明確な堆積層は見られない。1a区、2b区ではナツメヤシ枝葉家の柱跡が多数発見されたが、第2層で石積み壁をもつ家は発掘範囲から見つからなかった。柱跡は下層ばかりでなく、上層の貝殻層からも発見される。第2層の海拔は、柱跡が多数見つかる2b区の中央部で2.25mから2.00mである。第2層の堆積層は大量の貝殻を含む砂層であり、とくに真珠貝殻が多く、炭碎片、陶磁器・土器片、魚骨などが多く含まれている。

いくつかの薄い貝殻層が波打際方向に傾斜して下がり、貝殻堆積層はしだいに厚くなるが、海水に接する部分で貝殻層は消える。

第2b層1b区の波打際近くでアカシアの枝が数本、乱雑に並んだ状態で発見された。枝上の第2a層には貝殻が堆積しており、貝殻と枝の間の層には黒ずんだ砂と魚骨が堆積している。黒ずんだ砂は枝上に水平に層状に堆積している。

3) 第3層

第3層は1a区と2b区で部分的に発掘された。ナツメヤシ枝葉家の柱穴跡と周辺にゴミが捨てられた範囲が確認された。ゴミは当時の地表に平面的に広がり、明瞭な穴を掘っていない。

4) 第4層

第4層は第3層下の1a区と2b区で部分的に発掘された。その範囲と位置は第3層と同じである。ナツメヤシ枝葉家の柱穴跡とゴミが捨てられた範囲が発見された。この層は発掘区域内で最初の主要な生活層である。第4層より下には明瞭な生活の痕跡は見られず、自然堆積の砂層と粉碎された貝殻が混じる層が薄重なっている。

IV. 出土品

1) 第1層

大量の廃棄した貝殻と陶磁器片、魚と動物の骨、鉄釘、碎片となった炭などが出土した。

陶磁器：ヨーロッパ陶器、大碗、大皿。中国陶磁器、青花碗、盤、コーヒーカップ、色絵磁器コーヒーカップ。イラン淡青釉陶器釉下黒彩、鉢。イラン無釉土器瓶。現地周辺産の土器は大量に出土し、赤色粗質素地のクッキングポット土釜（器形は壺）と貯蔵用瓶壺が多く、黒粒が素地に混じる大盆、大壺も多く見られる。白化粧土上赤彩土器注口取手付瓶も少し見られる。

ガラス：ワイン瓶が多い。小さな瓶もある。

金属製品：青銅、銅、銀、鉄を素材とした製品が出土している。青銅製のコインとドア錠が目立つが、錆びた鉄釘は大量に出土している。その他、形が不明な鉄製品が多い。

コイン：第1層から350点以上のコインが出土した。ほぼ半数はマスカットで製造された1315AH (AD1897/98) で、その多くは径25mmであるが26mmのものもある。使用中に1mmがすり減ったものが多い。径26mmのコインは第1層の下方部に多く、上方部のものより錆びが少ない。

鉄製の大砲弾が出土した。一つは径13cmで重さ7.5kgである。第1層1b区道路堆積中の下方部から発見された。他は第1層2a区のピット68からの出土であり、半分は割れている。大量の鉄釘が部屋内の堆積土から出土しているが、多くは錆びて芯部分から剥がれかけている。

魚とイカ、動物の骨、アコヤガイ貝殻と他の食用貝殻は出土量が多い。いくつかの食用となる主要な種類の貝殻が主である。ヒツジ/ヤギ、ラクダ、海カメの骨も出土し、ヤギ骨が多い。アコヤガイ *Pinctada radiata* は真珠採取に用い、いくつかの食用貝には *Bivalvia Linnaeus* が多い。

2) 第2層

第2層の出土品は第1層の出土品に類似しているが、コインは異なり、第1層の主要なコインであった1897/98マスカット製製造コインは第2層から出土しない。これは第1層が20世紀前半に属し、第2層は19世紀に属することを示唆する。

第2層は厚く堆積した真珠貝殻層を含むが、これは

真珠採取作業場がこの時期に海岸砂浜にあったことを推察させる。第4層の下は自然堆積層で、そこには真珠貝殻層が見られない。

陶磁器片は大量に出土している。青釉陶器ランプが2a区から出土したが、これは稀なものであり、第1層ではランプの出土がなかった。土器香炉が第2層から出土したが、これも例外的な出土例である。

海石で造った魚網用の石錘が4点、2a区第1層家壁基礎の直下から出土した。1点は2つの孔があり、重さ1.35kg、もう1点は1.25kgで孔が1つである。

陶磁器

ヨーロッパ陶器は大碗や中皿が多く、オランダ、イギリス、その他の製品である。中国陶磁器は染付と上絵磁器が多く、碗、鉢、皿、盤、コーヒーカップなどがあり、福建省の製品が主である。中国褐釉陶器壺も僅かだが発見された。日本磁器は小皿やカップが少量発見された。

イラン陶器では、淡青釉下黒彩文陶器の碗、鉢、瓶が多い。紅釉陶器、黄釉陶器、緑釉陶器、白濁釉陶器の碗は少量だが第2層から発見される。イラン無釉土器瓶とローカル土器は大量に出土する。イラン無釉土器瓶の素地は硬質淡ピンクと軟質黄色に分かれる。クッキングポット(無釉土器調理用土鍋、土釜、形は壺)と貯蔵用大壺は多い。土器の素地は赤く粗いものが主である。赤く粗い素地の赤彩土器の水差と碗も出土した。第2層からは青釉陶器油ランプ1点と土器香炉2点が出土した。第2層でも土器がもっとも多い。ヨーロッパ陶器の量は中国陶磁器よりもやや多く、ともに食卓用の食器である。

その他の出土品

ガラス瓶類、青銅、銅、鉄、銀を素材にした製品が出土した。銅コインと鉄ドア錠、鉄釘が形の分かる主要な製品である。動物骨、魚骨、イカ貝殻、いくつかの種類の貝殻が出土した。魚骨、イカ貝殻、ヒツジ/ヤギ骨、ラクダ骨、真珠採取のアコヤガイ *Pinctada radiata*、食用の貝殻が主要な出土品である。ビーズやバンゲルは少量の出土である。丸い、あるいは潰して平らにした加工処理したデーツが出土している。ココナッツ殻も出土している。2b区のピット185からウミガメ腹側骨1体分が出土した。

3) 第3層

第3層の出土品は第2層出土品と類似している。コインは数少なくなり、第1層と異なるタイプのものが発見されている。黒粒の混じる黄色素地の土器は、第3層になると素地はピンクや赤色が少し混じるものもあり、砂質になる。混入する黒粒の数と大きさも少なく小さくなる。カーネリアンビーズが数個出土した。1a区の黒ずんだ砂層から魚頭と魚骨が密集して出土した。

4) 第4層

上層と比べると、陶器片は少なくなり、施釉陶器も少なくなる。オマーン褐釉陶器瓶やヨーロッパ、中国の施釉陶器も見られる。黒灰が付着した土鍋が主な出土品である。魚骨は多い。刃物の跡のある動物骨、ココナッツ殻、丸めた加工デーツも発見された。

5) 第4層の下層

数種類の小さく砕けた貝殻が混じる層と砂浜の自然砂層が薄い層位をなしていく層にも堆積している。そのなかに真珠貝殻はほとんど見る事ができない。

V. 発掘後の整理作業等

1) 発掘現場の作業

発掘中の現場での登録実測作業は、制限された環境と時間のなかで選択的に粗く行われた。僅かながら写真撮影と実測も現場で実施したが、出土品登録の作業はほとんどが発掘後に継続された。発掘中の段階的な遺跡写真は、遺跡の南西側に接して建つ高層ビル屋上から撮影した。水洗と分類作業が終わったいくつかの資料は一点ずつに分け、出土位置と層位などを記載し、登録番号を付け、袋や箱に入れ、ディバの倉庫にトラックで運んだ。水洗や分類作業、そして研究とカタログ化のほとんどはディバで継続することになった。現場で水洗いされた出土品は全体の10%以下である。毎日発掘される出土品は種類や地点で分類したが、その実施割合は10%以下程度であった。

2) ディバ倉庫の整理作業

発掘で収集した遺物は過去の地域社会の生活状況を理解するうえで重要である。考古学の研究方法に従えば、さらに以下のように遺物を整理調査することが必

要である。研究成果を挙げる遺物の分類作業、水洗とクリーニング、各遺物に地区と層位の記載、種類・形・産地などによる分類、破片の接合と復元、保存処置、写真撮影、実測図作成、発掘と遺物の記録記載、研究と報告、将来の博物館展示保管のための保管システムの確立である。

2013年5月、発掘終了直前に出土品を発掘現場からディバ倉庫に運んだ。その量は、第2層1a区の箱詰めしていない11トンの未分類出土品、大きなプラスチック袋詰めの数トンの未分類出土品、コンテナ150箱とプラスチック籠780箱の遺物で、合計45トンの出土品となった。大部分は大量の陶磁器片などを含む貝殻である。

2013年8月25日、ディバで貝、土器、ガラス、骨、その他が混じった状態の出土品を分類する作業を始めた。厳しい陽光で野外に置いた厚手のプラスチック大袋は粉状に砕け、数トンの貝や土器が袋から散乱し、カードに記した文字は消えた。散らばった貝や土器などを元のように新しい袋に入れ直し室内に納めた。第2層1a区でバスケットに入っていなかった11トンの貝殻や土器は地面上に山となって置かれていたが、貝、土器、ガラス、魚骨、動物骨、鳥骨、鉄、その他に半分の量が分類された。コンテナ150箱と780プラスチック籠の出土品は分類整理がなされず、ディバの庭に積み上げて置かれたままとなった。筆者の整理分類作業は9月22日に終えたが、作業員のみで野外に置かれた貝殻や土器の分類作業を10月末まで続けた。

2013年12月22日、ディバで整理作業を再開し、2014年2月18日まで分類を続けた。2014年10月から11月にかけて、さらに12月14日から2015年2月6日までディバで分類整理作業を続け、貝殻と陶磁器片などを分ける作業は終了した。

VI. いくつかの問題と成果

1) 層位的に発掘された居住地

今回の発掘はシャルジャ町の歴史的センターと言われる中心部での最初の考古学調査となった。いくつかの生活層で限定された出土品は、アラビア湾東側地域のシャルジャの貿易、漁業、真珠採取の歴史を知る基本的な記録となる。発掘区域は第1層、第2a層、第2b層、第3層、第4層の主要な5つの文化層に分け

られる。各層位の年代は次のように推測できる。

第1層は20世紀前半である。20世紀後半の層は銀行通り建設によって削平されている。昔の波打際に沿って建つ旧スークの一部である倉庫、店舗、居住した家が発掘によって姿を現し、日常活動の片鱗を覗かせてくれる。第1層は発掘区域内全域で発掘され、波打際の家壁の一部は遺跡展示用に公開保存されることとなった。

第2層は厚く密に堆積した貝層で、土器片や魚と動物の骨等が含まれる。いくつもの薄い層に細分されるが、第2a層位と第2b層に大きく区別される。廃棄されたアコヤガイ貝殻、炬、多数のナツメヤシ枝葉家の柱穴跡、ゴミ穴は、海岸に沿ってヒツジ/ヤギを飼育しナツメヤシを育てながら、漁業と真珠採取の活動、伝統的な地域社会の生活を思い描かせる。ガラスのパンダとコールスティックの存在は女性の居住を示し、丸くあるいは潰して平に加工したナツメヤシの実には彼らの食生活の一部を伺わせる。第2層の主要な年代は19世紀後半と推定できる。第2層は1a区、1b区、2a区、2b区 of 四か所で発掘された。

第3層は1a区と2b区 of 第2層部分の二か所を掘り下げた。第3層も漁業と真珠採取を行った伝統的なナツメヤシ枝葉家の生活を示している。19世紀中頃か前半の年代が推定される。

第4層は第3層と同じ範囲を発掘した。発掘区域内では最初に人々が居住した主要な生活層である。ナツメヤシ枝葉家の柱穴跡と、貝殻、灰、炭、魚骨、動物骨、土器片を含むゴミを投げ捨てた跡が散在していた。第3層と類似しているが、出土品の組み合わせは少なくなるようである。第4層の年代は19世紀初頭か18世紀末頃かと推定される。年代を確定するほどに十分な証拠はまだ得られていない。

シャルジャ市内の最初の発掘として、2012/13年の発掘調査はシャルジャにとってもばかりでなく、アラビア湾地域にとっても良好で重要な歴史的文物の発見となった。

2) なぜ真珠貝は海から浜へ運ばれ厚く堆積したか

発掘区域内から収集した貝殻は推計45トンである。重さで貝殻の75%前後を占めるのがアコヤガイ (*Pinctada fucata martensii*) である。アコヤガイは小さく類似した大きさで、ほとんどが2年生育貝である。

問題は、なぜアコヤガイ貝殻が海底の貝床から採取されて海岸の砂浜に厚く堆積するほど廃棄されたかである。

砂浜まで貝を運ぶのは、真珠を取り出すため、身を食べるため、貝殻で装飾品を作るため、などが考えられる。アラブ人が身を食べたことを疑う人は多いが、食べたという人もいる。ボタンなどを作るために貝殻を切った痕跡は見られず、若い貝殻のため装飾品を作るには薄すぎる。夏の船団による三カ月以上の真珠貝採取シーズン中だったのか、シーズン外の冬に家族単位で日帰り採取したのか、この種類の貝を集め浜に廃棄した季節も不明である。

海岸に沿う部分で厚い貝殻層が発見されたことは、一般に知られる夏季集団船団による真珠採取の方法、すなわち真珠採取後の貝殻は船から海に投げ捨てる方法以外に、浜に持ち帰る方法があったことを示す資料となった。

出土した層位ごとの貝殻の中でアコヤガイ貝殻が占める重さの割合は、第2層が69%、第3層が75%、第4層が75%である。ナツメヤシ枝葉家の側ですでに干からびた貝から真珠を採取し、貝殻をすぐ近くに廃棄したと推測される。アコヤガイの長さとしは平均すると、第2層出土が5.1cm、20g、第3層出土が5.3cm、20g、第4層出土が5.2cm、25gである。下層から上層になるにしたがい、しだいに大きめの貝が少なくなる傾向も見取れる。

3) スークシナヒーヤの痕跡は残っていたか

20世紀前半のスーク建物跡が発掘で姿を現した。その建物は石積基礎部分を除いて、1970年代の銀行通り建設によって取り壊された。発掘で出土した遺物は20世紀前半に属するものが主で、20世紀後半のものは非常に少ない。海岸水打ち際に沿うスークの石積み建物基礎は、第2層の厚く堆積した貝殻層の上に建てられている。スークの建物が建築される以前は、この地域はアコヤガイから真珠を採取する砂浜の作業場であった。

4) シャルジャ中心部の変遷が推定できたか

発掘した範囲は時間と排水設備の制限で下層ほど狭くなった。初期の町の状態を知るには発掘区域全体を掘ることが望まれたが、第2層、第3層、第4層の全

体を掘る十分な時間がなく、全域に排水設備を設置する費用もなかった。第2層、第3層、第4層で発掘区域内にナツメヤシ枝葉家以外には石積・レンガ積建物が見つからなかった。それらの各層では多数の柱穴跡が発見され、クリークに沿う海岸砂浜の上にナツメヤシ枝葉家に住む人々が、おそらく多人数いたことを推測させた。海岸に沿って何列も家が並び、19世紀には多くの人々が冬の漁業と夏の真珠採取に従事し生計を立てたと推定されるが、季節に関しては発掘によって確認されたわけではない。

発掘によって示されたのは、町中心部と思われた発掘地点で、ナツメヤシ枝葉家のみが建っていたことである。発掘した地点が昔は町の中心部でなかった可能性もあるが、これがシャルジャ町の実態であったのだろうか。

イギリス東インド会社が1820年と1822年に作成した地図によれば、シャルジャは陸側が壁に囲まれ、海側が壁の無い町として存在していたと描かれている。発掘地点はその町のなかに位置したはずだが、18世紀末か19世紀初めよりも古い年代の生活面が見つからない。この地点では漁業と真珠採取の活動が盛んで、それは19世紀末まで続いていた。古い年代の町中心部は南西すなわちジュベイル方向にあったのではないか。スルタン・ビン・サクル1世首長が1813年から居住したと言われる家は18世紀末に建てられたと伝えられるが、それは発掘地点から500m南に位置している。

発掘地点の層位セクションは、海側が傾斜して下がり波打際になり、陸側は層が薄く削平された部分が多いことを示す。陸側から波打際まで土砂を運んで第2層の貝殻層を埋めて平坦地を造成しながら、第1層の石積壁のスークが波打際に建てられた。旧スークが19世紀にあったとすれば、今より内陸側にあり、20世紀初めに波打際にスークシナヒーアを移動して建てたのであろう。

5) 地域社会の生活様相が発見・解釈できたか

発掘した遺跡から大量の残存物資が出土し、それはシャルジャ町に住んだ人々の生活の歴史を詳細に伝える情報の一部となった。



図1 シャルジャ遺跡とクリーク

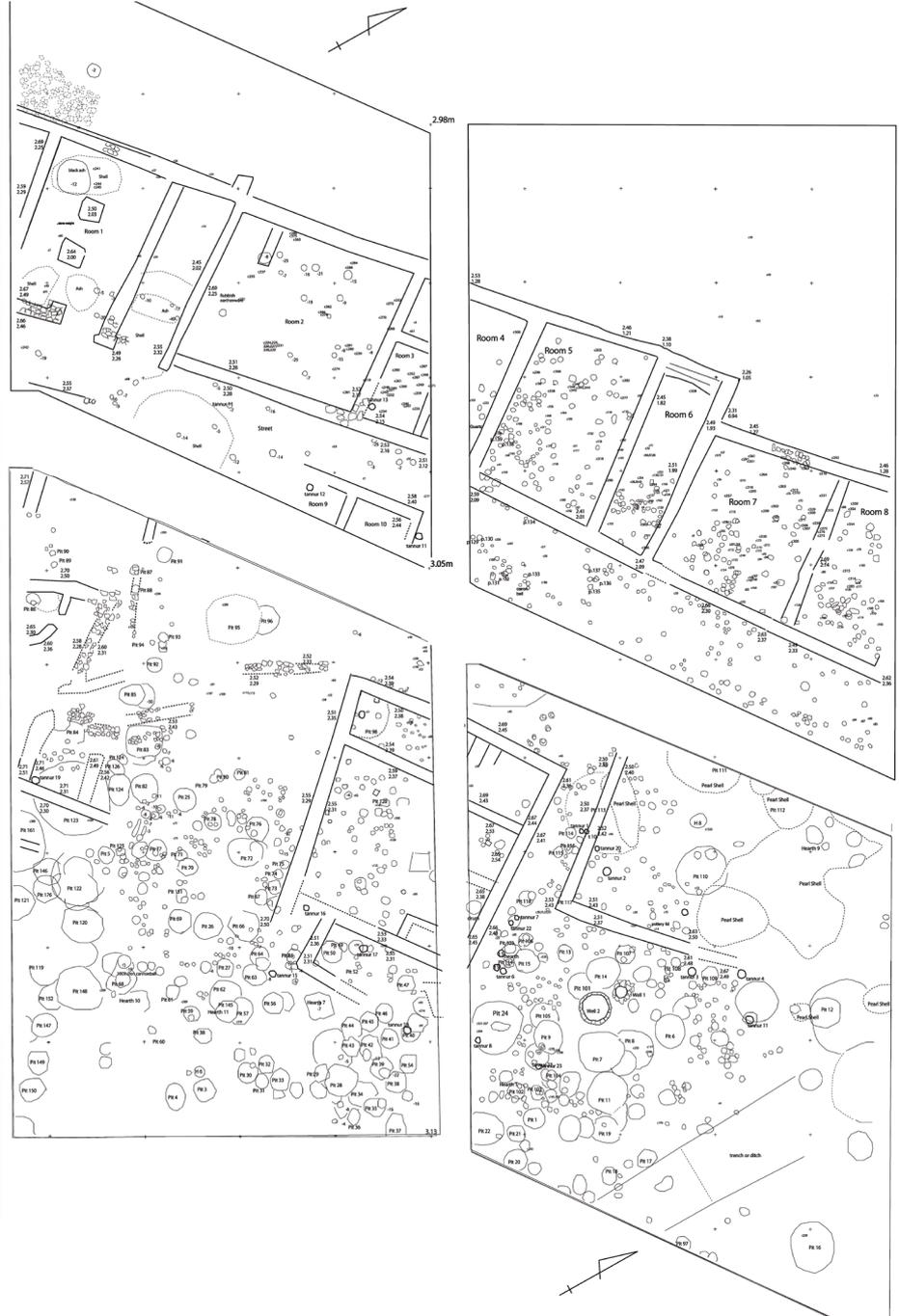


図3 第1層の遺構図



図2 第1層の遺構写真



図4 第1層石積壁家跡



図5 第1層波打際家壁基礎



図6 第1層ゴミ穴ピット24

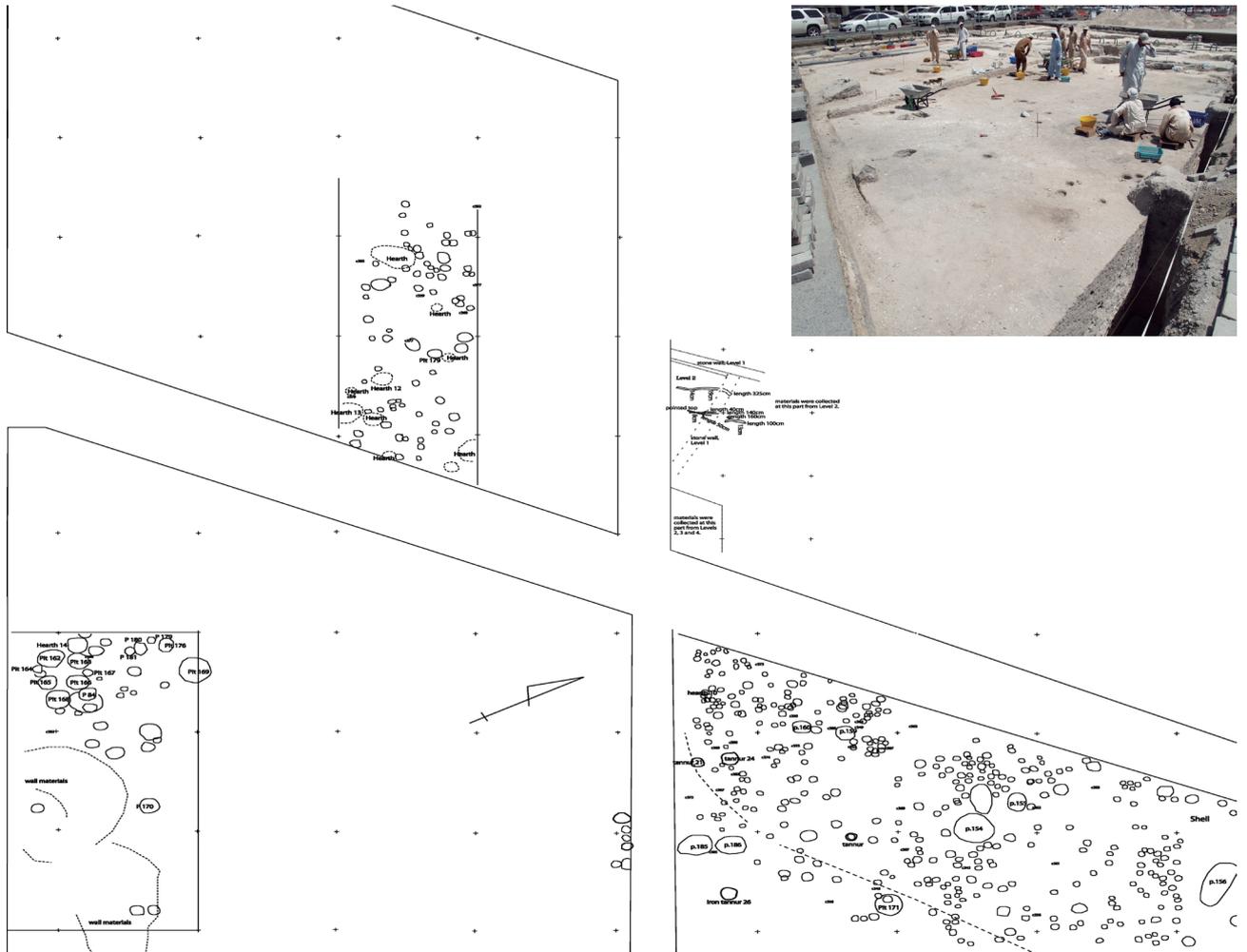


図7 第2層遺構図と2b区発掘風景

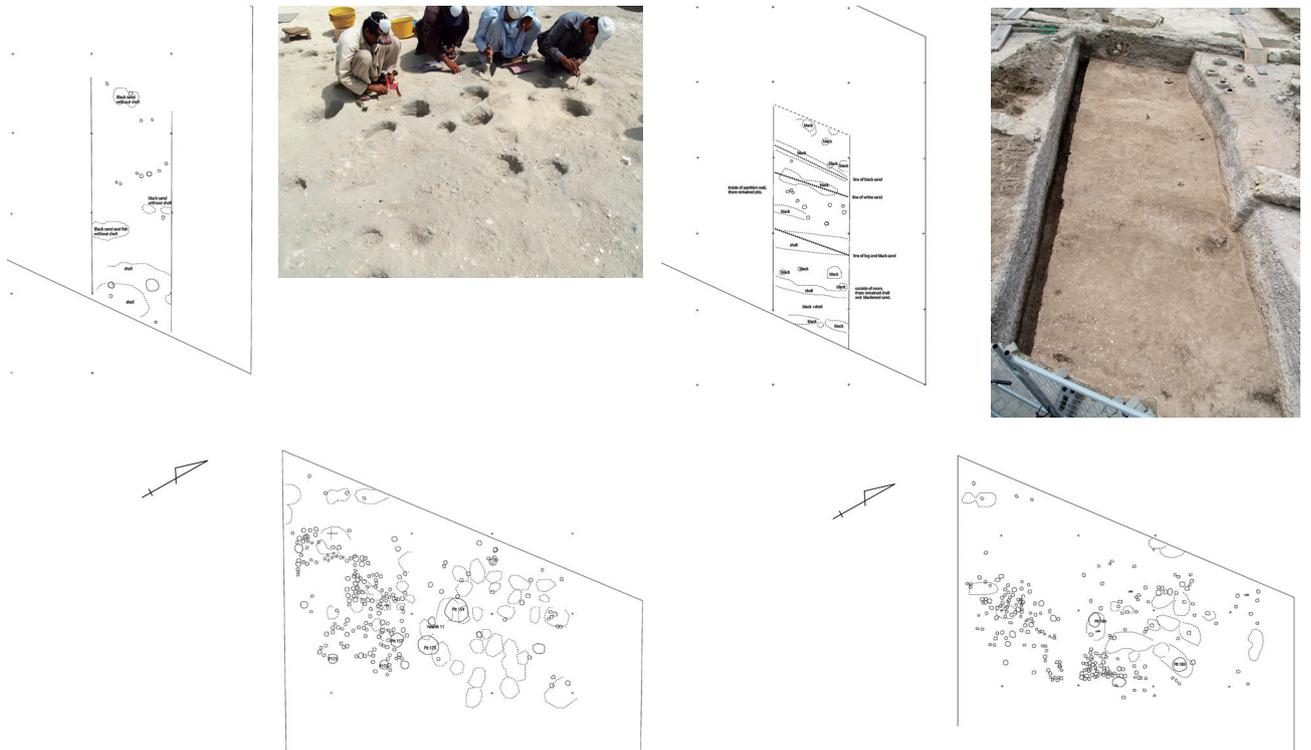


図8 第3層遺構図と2b区ピット発掘風景

図9 第4層遺構図と1a区写真



図10 第2層出土の装飾品



図11 第3層出土の魚骨等



図12 第1層出土コイン、1313(1897) Mascut, 1/4ANNA



図13 第2層出土ヨーロッパ陶器



図14 第1層出土中国陶磁器



図15 第4層出土オマーン褐釉陶器油瓶



図17 第1層出土ガラス瓶



図16 第2層出土イラン土器瓶



図18 第4層出土鉄釘



図19 第3層出土カーネリアンビーズ



図20 第4層出土木片



図21 第1層部屋6出土ヤギ骨、ナイフ切り痕あり



図22 アコヤ真珠貝殻

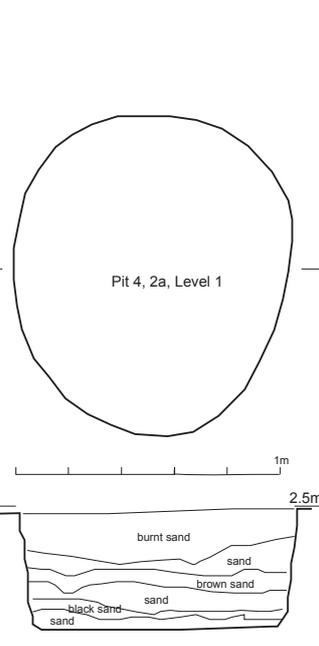
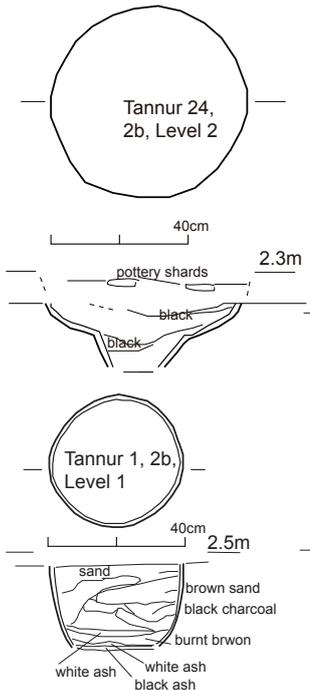


図23 第2層出土ナツメヤシ加工品



図24 第4層出土ココナツ殻

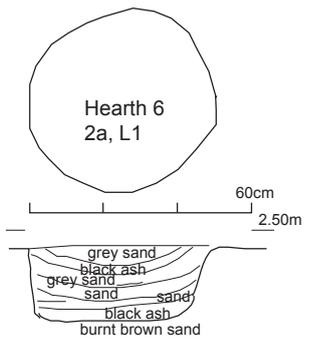


図25 第2層出土石錘

図26 Tannur, Pits, and Hearth 実測図

VII. 海港町としてのシャルジャの特徴

19世紀初めにイギリスが作成した2つの地図は、当時のシャルジャ町の配置を伝えるもっとも古い情報である。長い砂州の内側の狭いクリークは船舶が安全に停泊する場を提供している。町は砂浜に作られ、内陸側のみに防御壁をもつ。町は後背湿地・クリーク側に壁が無く開いており、その海は18世紀末頃はカワシム船団に支配され、その後は協定によりイギリス艦隊が支配した。そのため町にとって脅威となったのは砂漠からの侵略者であった。防御壁を海側にもたないタイプの町は典型的なアラビア湾の海港町であり、以前から一般的に見られるもので、地中海や東南アジア、東アジアの典型的な港市と異なるタイプである。このタイプの海港町は平和であった17世紀から19世紀の日本の港町と類似していると言え、日本の場合は内陸側でさえ防御壁を築いていない。

イギリス作成地図の町のプラン情報は概して写実的なものに見えるが、家屋配置に関しては2つの地図の間で違いがある。ナツメヤシは1822年地図のみに描かれる。1820年の地図には石積・レンガ積家がナツメヤシ枝葉家と区別してピンク色で描かれ、それは海側に位置するが、いくつかの家屋が大きなブロック状になって描かれている。1822年地図の家屋配置は複雑化したように見え、ピーター・ジャクソンは精度が増したと解釈し、20世紀後半地図に重ね合わせることができると言う。

発掘では石積家は20世紀文化層からのみ発見され、それ以前には無かった。19世紀文化層からはナツメヤシ枝葉家のみが海岸砂浜から発見され、地図と異なる。ピーター・ジャクソンの推測は次のようである。「ドバイやシャルジャの建築に関する都市的様相を見ると、石積・レンガ積家が海側近くに建てられ、ナツメヤシ枝葉家は内陸側に見られる。漁村ではナツメヤシ枝葉家が海岸に沿って立ち並ぶ。従って、石積家の町に広い空間があり、そこはナツメヤシ枝葉家で密集していたのであろう。」この考古学的証拠がない想像は正しいかもしれないし、誤りかも知れない。石積家は発掘地点より内陸側にあり、波打際にはナツメヤシ枝葉家が建っていたと想像するほうが発掘成果により近いだろう。19世紀前半のドバイの写真には、石積家と波打ち際の狭い空間にナツメヤシ枝葉家が建つ様子も見える。

真珠採取は一般に知られるのは6月から9月に行われる季節的な活動である。次のように想像することも可能だろうか。内陸から夏の暑さを避けてきた人々が海岸の砂浜に住み、男は真珠採取のために船団に乗って海に行き、残された家族が近海で採取した貝を処理していたという、そういう地点を発掘した。しかし、夏の暑い時期に家族は砂漠のオアシスに残り、男だけが海に行ったと言われるベドウィンの例もある。

真珠貝殻が大量に発見された居住域についての検討が必要である。19世紀のシャルジャで海底の貝床から貝を採取したのは、通年であったか季節的であったか、それは夏か冬か。浜辺で発見されたナツメヤシ枝葉家が季節的な居住であったとすれば、この地域は真珠採取のための村となり、町ではないことになる。多数の小穴すなわち柱穴跡がどの地区からも発見された。これは19世紀の浜辺に多くの人々が居住したことを伺わせる。19世紀に大量の貝殻層が広がる範囲は、波打際から内陸方向に30mから35mまでである。それより内陸側にどのような家屋が建っていたか、それは未調査で不明である。魚骨が多く見られることは、浜辺の人々の主要な食糧の一部が海から得られたことを示している。

装飾品・貴金属類は、アラブ首長国連邦のコールファッカンやディバの同時代の町跡と比べると非常に少ない。オマーン産の褐釉陶器壺瓶、夜間の灯り用の施釉陶器ランプ、ガラスのバングルとコールスティック、ガラスや石製のビーズ、指輪、その他の装飾品も、他の遺跡より少ない。1809年11月にイギリス軍隊がラッセルカイマで町と船を襲い、家々は焼かれた。軍隊はかなりの富を町から略奪した。1813年、カシミ首長はその多くの部下とともにラッセルカイマからシャルジャに移動した(Sultan 1994)。そのうちの一部の人々が、日常生活道具とくに台所用具のみを携え、装飾品など無しに第4層のナツメヤシ枝葉家に住んだかも知れない。しかし、貴金属類が少ないことは、第3層や第2層でも同じ状態である。発掘した地点のナツメヤシ枝葉家に住んだ人々は、主に漁業と真珠採取業に従事したが、同時にヒツジ/ヤギを飼育しナツメヤシを育てたことが明らかであろう。遺跡からは魚骨とともにヤギの骨も多く出土し、ナツメヤシの実を丸めた加工品もかなり発見される。

ヨーロッパ陶器と中国陶磁器の組み合わせはディ

バ、コールファッカン、コールカルバなどから出土したものと類似している。ヨーロッパ陶器は日本でも19世紀後半の外国人が住んだ横浜市山下居留地遺跡(かながわ考古学財団2010)出土品、19世紀前半の外国に開かれた長崎市出島遺跡(出島和蘭商館跡2010)という特殊な都市の出土品に類似品が見られる。しかし、シャルジャやアラビア湾地域で発見される中国陶磁器は、有田や瀬戸などの日本製陶磁器が優れているため日本で出土することが無い。アラビア湾岸の遺跡で一般的に見られる銅版刷絵彩やラスタースタイルの製品は、主に20世紀前半の日本、中国、ヨーロッパの製品であるが、日本では遺跡から出土しない。

港町は島や半島、クリークに沿って、あるいは砂洲の上に築かれることが多い。潮が満ちると港町の周辺が海となることもある。冬の季節風が吹く貿易シーズンは各地から人々と船が集まり、市が立ち、シーズンが終わって船が去ると内陸から来た人々も去り、港町は無人の地となることもある。シャルジャの港町もそうした立地に築かれたが、真珠採取という夏の季節があることがアラビア湾の特徴であり、他の地域の港町と違う点であった。内陸から来た人も一緒に船に乗り、町からは屈強の男が3カ月以上姿を消した。発掘は浜辺のナツメヤシ枝葉家に住む人々の伝統的な暮らしを掘り起こした。

発掘されたいくつかの様相と出土品の分析によって、シャルジャに住んだ人々の歴史にさらに多くの光が投げかけられることが期待される。

参考文献(刊行年順)

Sasaki, T. 1990 Excavation at A'Ali -1988/89-, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, 20: 111-129.

Sasaki, T., and Sasaki, H. 1992 Japanese Excavations at Julfar-1988,1989,1990 and 1991 Seasons-, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, 22:105-120.

佐々木達夫 1993「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20:1-44.

Sasaki T. 1993 Excavations at Julfar in 1992 season, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 20:45-49.

佐々木達夫 1993「インド洋の中世陶磁貿易が語る生活」『上智アジア学』11:87-117.

佐々木達夫 1994, 1993 Excavations at Julfar, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 1-106.

Sultan Bin Mohammad Al-Qasimi 1994 "John Malcolm and the British commercial base in the Gulf 1800."

Slot B.J. 1995 "The Arabs of The Gulf 1602-1784", second edition (first edition 1993), Leidshendam, Netherlands.

Sasaki T. & Sasaki H. 1995 Excavation at Julfar 1993, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, 25:107-116.

佐々木達夫 1995「物が語るインド洋の交流」『文明と環境 10 巻 海と文明』朝倉書店,109-130.

Sasaki, T. 1995, 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa,22:1-74.

Sasaki, T. 1996, 1995 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Ras al-Khaimah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:37-178.

Sasaki, T. 1996 Umayyad and Abbasid finds from the 1994 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:179-222.

Sasaki T. & Sasaki H. 1998, 1997 Excavations at Jazirat Al-Hulayla, Ras Al-Khaimah, U.A.E., Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 24:99-196.

佐々木達夫 1997「ウマイヤ・アッバス朝のアラビア湾岸住居」『住の考古学』同成社,244-257.

佐々木達夫, 佐々木花江 2000「ハレイラ島の発掘—1998年—」『金沢大学考古学紀要』25:118-169.

佐々木花江, 佐々木達夫 2003「物を使用した場所の検討—コールカルバ町跡の景観復元—」『第10回ヘレニズム〜イスラーム考古学研究』69-80.

佐々木達夫 2005「ペルシア湾と砂漠を結ぶ港町」『港町と海域世界』269-296, 青木書店.

佐々木達夫, 佐々木花江 2005「発掘資料解釈と景観復元によるジュルファルの都市的性格検証」『オリエント』48-1:26-48.

佐々木達夫 2005「ルリーヤ砦出土13世紀末のイスラーム陶器」『西アジア考古学』6:151-165.

佐々木達夫 2005「ペルシア湾岸遺跡出土の陶磁器」『東洋陶磁』34:13-30.

佐々木達夫 2005「アラブ首長国連邦オマーン湾岸のイスラーム時代町跡」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』25:39-192.

佐々木達夫 2006「ジュルファール出土陶磁器の重量」『金

- 沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』26:51-202.
- 佐々木達夫 2007「オマーン湾岸北部地域の遺跡出土陶磁器」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』27:203-282.
- Sasaki H. & Sasaki T. 2008 Nomadic Occupations in the Desert『第15回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』54-58.
- 佐々木達夫, 佐々木花江 2008「コールファッカンの砦と町跡の発掘調査概要」『金沢大学考古学紀要』29:60-175.
- 佐々木達夫, 佐々木花江 編 2010『シャルジャ、砂漠と海の文明交流—アラビアの歴史遺産と文化—』シャルジャ展日本開催委員会.
- 天野賢一, 宍戸信悟, 近野正幸 2010『山下居留地遺跡』かながわ考古学財団.
- 山口美由紀 2010『出島和蘭商館跡第1分冊南側護岸石垣発掘調査報告書』長崎市教育委員会.
- 佐々木達夫, 佐々木花江 2013「アラビア湾港町遺跡の発掘解釈」『第20回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 125-135.